
仮面ライダーDIM

神之神 啓護

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーDIM

【Nコード】

N5247J

【作者名】

神之神 啓護

【あらすじ】

ボクの入っている、仮面ライダー同好会

ある日、隣町の『風都』で『ヤバイ』ものの詮索活動をしていた所突然、マグマドーパントRと名乗る異形が現れて…?!

プロローグ (前書き)

始めまして、神之神 啓護です

時折テンションがおかしくなる新参者ですがよろしく

お願いします

酷評もバッチOKなので、どんどんダメな所を指摘して下さい
では、完全オリジナルライダー

仮面ライダーDIM、スタートです！

プロローグ

「くあ」

ボクの欠伸と同時に、けだるさを感じさせる鐘の音が、頭上で響き渡る

それは、ほとんどの学生にとっては眠気がピークとなる五限目の授業が終わるという合図

「よし、今日はここまでだ、宿題は――」

厳格を感じさせる教師の声は、まだ続く

と、言っても殆どの生徒は意識が半分飛んでいるだろう

しかしその殆どに含まれない、ボクと数人は宿題をメモして行く、こうしておかないと後々に宿題を遥か離れた校舎までいかなければ、ならない

「――じゃあ、このまま担任が来るまで教室にいろよ、っと田中お前は昨日の宿題がまだだからな明日中にだぞ」

「えー？メンドー」

田中と呼ばれた彼は教科書をパタパタと振って、やるきの無い声でうめく

「面倒じゃない、少しは大夢と侑斗を見習ったらどうだ」

侑斗と呼ばれた彼は、窓の外を死んだ魚のような目で見つめている
本名は：たしか桜井 侑斗（さくらいゆうと、丁度半年前に転入してきた謎多き美少年ってところか

一方、大夢と呼ばれた方は照れたようにボウズ頭をポリポリと掻いている

こちらはボクが良く知っている

にほんまつ

だいむ

二本松 大夢は入学当時からの大親友で、仮面ライダー好きとかファンすら超えているとか周りからは変わった名前と、言われているが寧ろ本人は「他人に覚えてもらえやすくて嬉しい」と喜んでいた

「せんせー、楓君^{ふうくん}はどうなんですかー？」

「少なくとも田中とは比べられないな、なあ楓矢」

「…なんでボクに聞くんですか」

ここで、ボクの名前を指定しなくても…それにふうくんのアダ名は余り気に入ってないのに

本名はルドベギア・楓矢・スイレン

外国人っぽい名前だが純潔の日本人だ、まあ生まれた場所が外国だからこうなったのだが

ちなみに名前が花から来ているのでならべると「正しい選択・非凡な才能・滅亡」だ

さらにマメ知識だが楓の花言葉は他にも「自制、遠慮、確保」がある訳だ

まあどうでもいいのだが、日本では別の名前『舞桐^{まいきり} 楓矢^{ふうや}』を使っている

「なんでって、常にクラスで1位だろお前」

くだらない考え事をしていたせいか突然の応答に少々、内心で驚き、だが声色は変えず

「クラスで、でしょう学年で2位、学校全体では4位ですよ」

ボクの学校では通常の模擬試験^{テスト}に加えて、学校全体で行うテストも行われているのだ内容は中学校の応用的問題が多いが、高校のボクにとっては、余り関係のないことだ

「それでも、充分に凄^{すご}いんだがな…つと無駄話が長過ぎたな、じゃ」そして、教師は去り入れ替わりに担任の名護先生が入ってくる

「皆さん、席につきなさい」

名護先生は、誰からも親しまれやすく、明るい人気者の先生——とはまったく別物で、ルックスは素晴らしいのだが、淡々とした喋り方と帯妻者である事から男子から妬まれているが、1部の腐女子からはキヤーキヤー言われているらしい、運動神経は素晴らしくないでも『素晴らしき青空の会』と言う、スポーツジムに所属し鍛えていると言う噂が飛び交っているとか

「それでは、HRを始めます」

——そして長い話しが始まるのだった——

——数十分後——

「うえー、ナゴセンの話し長すぎー」

「仕方ないだろ、そういう人なんだからさ」

大量のコードとパソコンの画面が、本来なら電球に照らされておらず薄暗い部屋を明るくしている

ここは、ボクが入っている部活『仮面ライダー同好会』の部室である
カシャカシャと、キーボードを叩く音が鳴りつづけていたが、数人しかいない部員の一人、大夢がうめくように言って、キーボードを叩く手を止める

「だってさー、いくらこの顧問だからってさー」

「それは関係ないだろう」

確かに名護先生の話しは長いが、よく聞いていると深みがあるのだ
実際に救われた人も度々いるとか

「うー、そうだけどさー」

「ほら、解ったらさっさとそのデータをまとめちゃって」

大夢の顔が、チラリと山積みになっている書類を見て笑顔になる

「新しいデータ?! やっつい!」

そして、書類の中へとダイブし、読み焦る大夢……ちゃんと片付けてくれよな

そもそも仮面ライダー同好会の活動は、ただ仮面ライダーについて熱く語るだけだったはずなのに大夢と名護先生ともう一人：桜井侑斗が入ってからと言うものの、どんな小さな噂、情報でも仮面ライダーに関する情報は聞き逃さず、それについてのサイト、投稿箱を設置し定期的にそれをまとめると言う作業をしているのだ、まあ殆どの情報はパチモノなので矛盾が発生しやすいのだが、中には本物らしき情報も——

「っし、これは怪しいな…ふーくん! お願い!!」

ボフ、と言う音と共に投げられた書類が顔面に当たる
いたくも痒くも無いが少なからず苛立ちを感じながらも、書類に目
を通し始める

『投稿者 アンダーバット4111世』

この前、裏路地を通りかかったとき、翠色の何かがいた！
めっちゃかつこよかったけど、すぐに消えてしまいました……
でも何かカードっぽいもんが落ちていたので、一緒に送ります
ちなみに呪いのカードだったらゴメンナサイ！』

そして、その端には緑色のラインで基本色は黒の硬質のカードが袋
に入れられていた

一応、今のデータはパソコンに入れてツと…そして改めてカードを
手に取り、マジマジと見つめる

「何処かのデータカードダスでも定期でもなさそうだし…玩具の
1部にしてはシンプル過ぎるよな…」

何回見ても変わらないのは解っているが、どうしても何か引っかか
るような感じがする

魚の小骨が喉に引っかかったみたい…そんな感じだ

「…ふうむ、難しいな」

「何処が?! 仮面ライダーの変身グッズだと思えばいいじゃん!
それよりこれ見てよ!!!」

突然、ボクの顔を除き込んで嬉々としたように1枚の写真を突きつ
ける

「む……これは？」

「裏の情報屋の『ミック』から手に入れた写真さ、勿論加工なんて
してないそれはミック自身が証明した」

その写真には、黒と緑という左右対称の人っぽいのが、まさに異形
と呼ぶに等しいのと拳を交えている姿だった

「ってかミック? またあいつなのか、そろそろ手を切らないと被害

にそのうち――」

「大丈夫、彼には色々サービスしてるからさ、よっぽどのが無い限り、ウソはつかないよ」

情報屋のミック、彼はボクの住んでいる街の全てを知っているとい
っていいほどの、情報を持っている

しかし、何故彼と大夢が繋がるのか……そこは謎だ、そもそもサー
ビスとはなんだろう？

「だったらいいけどね、これは何処の場所？」

「えっと……ああ、確か『風都』って所からのだね」

風都、確か隣町だったけ？ 余り記憶には無いのだが確か有名なのは
風都タワーやそれに因^{ちな}んだラメーンとか

「風都からか、あそこは平和なところが多いからな」

「うん、でも裏では何かヤバイもんが出まわってるらしい……そこ
こ・で！」

ひとさし指を立てた大夢に、強烈な悪寒を感じる

「今から仮面ライダー同好会は、その『ヤバイ』もんを手に入れる
ために、風都にて探索活動を開始する！」

ああ、やはりこういう事になってしまうのか

『ヤバイ』もんと、仮面ライダーがどう関係してくるのか解らない
が携帯やらジャンバーやら張りきって準備する彼は、もう止められ
ない

深い溜息をついて、ボクも外に出るための準備を開始した

プロローグ (後書き)

THE NEXT KAMAN RIDE!

風都に到着した二人は、別々の行動を取る

しかし、舞桐の目の前に現れたのはマグマドールパントRと名乗る異形だった！

絶体絶命の舞桐……しかし、目の前に突如現れたのは？！

『Dの変身／メモリーゲット』

次回も、全力で決める！

D I M 2 『Dの変身／メモリーゲット』 (前書き)

最近、コラボが人気になっているようですね

ここで一つアンケート的な事を、いや：質問ですかね？

Q、仮面ライダーのコラボを流行らしたのは誰なのでしょうか？

DIM2『Dの変身／メモリーゲット』

——風都——

「やってきましたああ！風都おお！！」

「ちょっと、変人かと思われるから止めてよ」

ハイテンションな、大夢にツッコミをいれつつも周りを見てみる
あらゆる所に風車が立っていて、それは風を受けまわっている
それは、当たり前なのだが……風車の数が多過ぎる

「えっと…資料によると、ここは『風都』風が常に吹いていて、風車も回っている

別名『エコの街』で、風麺や、ふうとくんが有名だよね」

「物知りだよね」

「インターネットで検索しただけです」

大夢とのやりとりをした後、周りの視線が痛くなってきたので、最寄のカフェの近くへ移動、移動っ

「……それで、今回のヤバイもんってなんですか？」

「ふっふっふー、やはりそう来たか」

何故かエヘンと胸を張り、そしてボクの耳にボソリと呟く

「——ガイアメモリって聞いたことある？」

ガイアメモリ——か、ガイアメモリは噂程度でしか知らないが度々、風都にドーパントと言う異形が現れて様々な被害をもたらしているしかし、大概は仮面ライダーと思われる人物がそれらを倒しているとかいないとか

その姿は余りにも知らされておらず、ただ風都を守ってくれと言う事は確かなようだ

「ああ、少しなら知ってるけど……まさか」

「そう！今回は風都を探索し、ガイアメモリを手に入れること！」
拳を突き上げて、おー！と言っている大夢を見て、哀れみなどの感情を込め深い溜息をつく

「無理だって、そう簡単に手に入るわけが無いし……そもそも、ガイアメモリは買っちゃダメなんだよ？」

「だいじょーぶ！ 見つからなければ問題ナシ！ それに、今回は力強い助っ人スケットを頼んだんだ！」

「スケット？」

大夢は嬉々としたように、電話を取りだし何処かにかけ始める
結局、こうだ止めようとしても捲くし立てられて……最終的には大夢に振りまわされてしまう

「翔太郎さん、ボクです、依頼者の大夢です……はい、風都につきました依頼の内容は事務所の方で——はい」

パチン、とケータイを閉じて大夢は荷物を持ち——ボクに1枚の紙を突きつける

「これは……？」

「今から別行動を取ろうよ、助っ人はボクと組みたいと言ってるし……じゃあ」

それだけ言って疾風の如く去って行く……待て？！ 激しく待てい！

「待てー！ 紙1枚じゃどうにもならない！ おーい！」

……駄目だ完全に消えちゃったよ、あいつ体育はSだったからな
何て納得してる場合じゃない！ 取り合えず渡された紙を見ているな、なんとそこには——

『GA・N・BA・RE☆』

……ふざけるなああああ！

心の中で叫びつつ紙を破り捨て、これからの行動に頭を抱え込む
そして、取り合えず大夢に電話を掛けようとした瞬間、人と強烈にぶつかり尻餅をつく
ぶつけた本人は、ごめんなさいの、この文字も言わず走り去っていった

「なんだよッ、勝手にぶつかって……ん？」

ふと、手に違和感を覚えてそれを見てみるとそこにはやや大きめの銀のアタッシュケースが置いてあった

さらに殴り書きで

『これを暫く預かってください』

と書かれている、相当急いでいたのか名前の方までは解読できなかったが

……なんだろう、中身が凄く気になるのだが

だが、ご丁寧に南京錠が掛けられており開く事ができない

警察に届けよう、とは思ったものの何処かに預けてもその人が取りに来る可能性はかなり低くなる

「仕方ないな、適当に辺りをまわってみるか」

アタッシュケースを手にして、ボクは聞きこみ調査を開始するのだ
った

——そして、数時間後——

「ほんとに、この辺りにいるのかなあ……」

聞きに聞きまくった結果、薄暗い廃倉庫の前に来てしまったボク

ここに、怪しい商人がいるとか、いないとか

「お邪魔しまあーす」

ガラガラガラ、と大きい音を立てて開いたトビラをくぐり、中に入る
以外と中は綺麗で荷物がまとまっていたりする

でも、量が量だ、人一人っ子しか通れないような道がいくつかに分
かれている

ボクは荷物を傷つけないようにしながらも、前へと進んで行く

しかしホントに凄いな、天まで届きそうな荷物の数、中身が物凄
い気になる

「……ん？」

若干、熱くなってきたような……ってか熱い！ 冬なのに？！

駄目だ、早くでないと！ あ、扉だ外にでられ……

『はあーい、ボ・ウ・ヤ』

完璧なオカマの声と、体に加わった衝撃でボクの体は宙を舞う
そしてダンボールの壁に叩きつけられる

「ぐ……なッ!？」

ふらつきながらも、立ったボクの目の前に有り得ない光景が写る
異形だ、しかも体にマグマのような炎を纏っている

『ここまで、辿りつくなんてさすがブラックリストに乗っているコ
の息子ネ、アタシはマグマドーパーントR』

「何を言っている…!」

アタッシュケースを盾にしながら、一步ずつ下がるボクに対して相
手は迫るように近づく

『フフ、なんでもないワ、でもここにきたコは全員……シが待つて
るのヨ!』

「あ……ぐわああああ!!」

瞬間的なスピードで一撃を与えられて吹っ飛ぶ……だ、だめだここ
ままじゃ

地面に叩きつけられて衝撃と共に苦い鉄の味が口に広がり、赤い液
体となって口からしたたり落ちる

『ふふ、チはいいわネ、かわいいコをさらにカワイクさせるワ』

「あ……ぐ」

最早立つので精一杯だ、ああもって生きたかった楽しく人生を過ご
したかった

半分諦めかけて、アタッシュケースを落とす……しかし、それと同
時に中身が飛び出した

それに目を向けることも無く膝をつく

『……ウ、ウソ?! どうして『ガイアメモリー』ガ?!』

「え」

ガイアメモリー、その言葉に反応してそれを見ると……確かに大量の
メモリーと……凹型の何かが落ちていた

反射的にそれと、適当に置いてあったメモリーを手取るそれには
『D』ただそれだけが書かれていた

『シ、しま……』

「変・身！」

そしてボクはメモリーを――

D I M 2 『Dの変身／メモリーゲット』 (後書き)

T H E N E X T R I D E !

D I M ^{デイム}へと変身した舞桐

しかし、止めを刺さんとした時…?

一方

大夢は鳴滝という人物に出会い…?!

『Dの変身／チェンジ・ザ・デイム& a m p.; 大夢?!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5247j/>

仮面ライダーDIM

2010年10月10日21時22分発行